No 11 NUIC

斗う黒旗の下へ

日本大学全学共闘会議
理工学部工化斗争委員会

再度のロックアウト策動を弾劾し 自治会室 幹事会室の解放を!!

■ 新生古田体制打倒!!
■ 九項目完全実体化!!

暴虐の雲 光を覆い 敵の嵐は荒れ狂う ひるまず進め 我等の友よ 敵の鉄鎖
を打ち砕け 自由の火柱輝かしく 頭上高く燃えたちぬ 今や最期の斗いに
勝利の旗はひらめかん 起て同胞よ 行け斗いに 聖なる血にまみれよ
砦の上に我等の世界 築き固めよ 勇ましく.

全ての斗う学友諸君!!

大学治安立法下におけるモデル校としての新生古田体制の再現は過去の一切の犯罪性を隠蔽し鋼鉄の厚い壁と治安関東軍の常駐という狂信的な弾圧=日大アウシュヴィッツ体制を五百日にもわたる我々の斗いの唯一の回答として国家権力と一体化した形において為された。　しかしながら、全ゆる弾圧に抗し根底的な古田体制の破壊をめざす非妥協的日大斗争は、医学部の無期限スト突入を最大のメルクマールとして、現在までの混迷的状況を脱し、再び巨大な進撃を開始しようとしている。

数人の執行部の独断で決定された今回のロックアウトは、理工学部における斗いの高揚を恐れ、又活動家部分と一般大衆との隔離を目的とした学校当局の卑劣な斗争圧殺である。このような弾圧をはねのけ断固としたロックアウト策動抗議集会を展開した理斗委には、学校当局の要請である国家権力の暴力装置=機動隊をさし向け、四名の斗う学友を不当逮捕し、その他、多くの学友を負傷させた。又、更に、17号館内に入ろうとした官憲に抗議し、阻止しようとした学友に「学校側に連絡がついているんだ」と公言して、暴力的に侵入し、多くの学友を17号館から追い出した。我々は、このような、学校当局の見事なまでの国家権力との一体化を、するどく弾劾し、再度のロックアウトには、実力でもって対応し、これを粉砕しようではないか。

又、非常時という理由だけで、1号館自治会室、2号館工化薬科幹事会室を封鎖し、我々の斗う拠点の確保を妨げている。我々工化斗争委員会は、現実的課題としてこの幹事会室解放の斗いを九項目の実体化、そして、日大アウシュヴィッツ体制の崩壊、ひいては、再度の全学バリストへの基石として位置付け、薬学科斗争委員会と固い連帯の下で全エネルギーをかけて斗い抜く方針である。

我々がもっとも恐れるのは、八号館を囲む鉄柵を、唯の鉄柵として見すごそうとする『非常の日常性』である。　あの堅く閉ざされた門を、そして、鋼鉄で覆われた窓を、喪失した信頼の変身として凝視し、古田に自己の延命を求めた多くの教授に限り無い憎悪を投げかけようではないか。

日大斗争において、一切のオブザーバー的立場など存在し得ない。日大全共闘への弾圧は、即君自身への弾圧なのだ。そして日大全共闘の矛盾は、即君自身の矛盾なのだ。

今や沈黙は、反動と敗北、そして反革命への代名詞でしかない。一切の恐怖と幻想を捨て去り再度の総決起の大渦の中へ!!

永田菊四郎死去!!

人間としての彼の死には、いささかの哀悼の念を感じるが、暗黒と反動の旧体制を擁護し、現在もなお、名誉総長として、我々を弾圧し、敵対しつづけてきた永田菊四郎の死を怒りと嘲笑で迎えようではないか。唯、死というだけで彼の過去の一切の犯罪性を拭い去るには あまりにも彼の一生は汚なく犯罪的であった。

天と地を分かつ時が来た
むなしく四散した信頼には早々に訣別せよ
一切の幻想は 我々に失望と憎悪しか与えなかったではないか
友よ!! 人としての存在を望むのなら 我々と共に斗おう
揺れ動く現時点において 無自覚的に学ぶ事自体 反革命なのだ
友よ! 何故 我々は 鉄柵と鉄格子の中で学ばなければならないのか
そして、何故 日常性への埋没が これ程に強いられているのか……
斗いを中止する理由も条件も 何一つ存在しないではないか
我々は この激烈な斗いを歴史の中に埋める事を断固として拒否する

9.26 理工学部 総決起集会　1号館自治会室 2号館工化薬科幹事会室解放!!　12じ 6号館集合